

2023. 5. 14 (日) 使徒8:1~3

8:1 サウロは、ステパノを殺すことに賛成していた。その日、エルサレムの教会に対する激しい迫害が起こり、使徒たち以外はみな、ユダヤとサマリアの諸地方に散らされた。

8:2 敬虔な人たちはステパノを葬り、彼のためにたいへん悲しんだ。

8:3 サウロは家から家に押し入って、教会を荒らし、男も女も引きずり出して、牢に入れた。

<説教>

使徒の働き7章を通して、初代キリスト教会の最初の殉教者ステパノの説教とその死から学んで来ました。ステパノは死に至るまで忠実に主イエス・キリストを信じ、主イエスに依り頼み、従い、主イエスを証しました。その結果ステパノは石打ちという酷(むご)たらしい悲惨な仕方で殺されました。しかし彼は、父なる神の右におられて彼のために父なる神にとりなしてくださっている主イエスから目をはなしませんでした。「主イエスよ」「主よ」と主の御名を呼びながら、祈りながら地上の生涯を終えました。肉体は痛めつけられ悲惨な死を遂げましたが、その心はたましいは全く平安でした。それはひとえに主イエス・キリストのおかげででした。また、ステパノが受け、彼のうちに満ちておられた聖霊の力によることでした。

そのようにしてステパノがこの地上でキリストを証しし、キリストの栄光を現す働きを主は終わらせました。しかし続けて主は、また主の御霊、聖霊は、お召しになった人々を用いて、彼らの願いや思いを遙かに超えて、神ご自身ののみこころを、ご計画を進めて行かれます。主がお召しになった人々とはサウロ(後のパウロ)であり、使徒たちであり、使徒たち以外でユダヤとサマリヤの諸地方に散らされた人々ということになります。

さて、ステパノの死との関連でということでしょう、まずサウロの名前をルカは挙げます。すでにステパノに石を投げつけた証人たちが自分たちの上着をサウロの足もとに置いたことを記していました(7:58)。〈サウロは、ステパノを殺すことに賛成していた。〉(8:1a)ということで、サウロがステパノを殺すことに積極的に参画していたことが分かります。それはステパノが、イエスがキリストであると教え、宣べ伝えていたからにほかなりませんでした。後にパウロとして次のように証ししているとおりです。「そしてこの道を迫害し、男でも女でも縛って牢に入れ、死にまでも至らせました。このことについては、大祭司や長老会全体も私のために証言してくれます。」(22:4-5a)。また、「実は私自身も、ナザレ人イエスの名に対して、徹底して反対すべきであると考えていました。そして、それをエルサレムで実行しました。祭司長たちから権限を受けた私は、多くの聖徒たちを牢に閉じ込め、彼らが殺されるときには賛成の票を投じました。」(26:9-10)。本日の聖書(8:3)に〈サウロは家から家に押し入って、教会を荒らし、男も女も引きずり出して、牢に入れた。〉とある、その内容はそういうことでした。「荒らす」とは、野獣が人間を襲って傷つけ殺すことを意味する言葉だそうです。サウロがしたことは、もはや人間わざではない、血も涙もない、現代風に言えば完全な人権侵害であり、暴力による傷害罪、殺人罪となる大犯罪でした。そのことをサウロは個人的にでもなく、脇役としてでもなく、公に、計画し、そして実行したのでした。

確かにこの後、9章以下に記されているように主はサウロに現れてくださり、サウロを

ご自分のしもべ、証人としてお召しになります。サウロはまさに生まれ変わり、パウロとしていわば唯一無二と言えるほどに主のために大きな働きをすることになります。しかしパウロ自身、自分が過去に犯したこのような罪の決して忘れてはいませんでした。これもまた後に自分で言っています。「私は使徒の中では最も小さい者であり、神の教会を迫害したのですから、使徒と呼ばれるに値しない者です。」(I コリント 15:9)と。もちろん〈神の教会を迫害した〉罪は神の恵みによって、主イエス・キリストによって赦していただきましたし、使徒という職務まで与えていただきました。しかし彼は自分が教会を迫害して、多くの人々を非常に悲しませ、苦しめ、傷つけ、死に至らしめたこと、という罪を犯したことを、決して消すことのできない過去の事実を忘れることはありませんでした。あのときの自分は罪と悪魔の支配下にあつて獣のようになって残酷で大きな罪を犯していたのだつたということを決して忘れませんでした。だからこそ、後に主イエス・キリストの力によって悪魔の支配から解放され、しかも使徒として召された恵みに対する感謝と喜びの故に、どれほど主のために多く働いたとしても、そのことを決して誇ることなく、へりくだっていることができたのだと思います。

〈敬虔な人たちはステパノを葬り、彼のためにたいへん悲しんだ。〉(2)という件(くだり)も、まずはそれこそ敬虔で信仰深く、聖霊に満たされ、やもめたちへの毎日の配給の奉仕をし、主の証人として言葉と行いをもって良き働きをしていたステパノが迫害され殺されていなくなってしまうという悲しさ、悔しさ、無念さが表されていると思います。もちろん復活の希望はありましたが、それでもなお、という思いです。

さて、そんなステパノの殉教の〈その日、エルサレムの教会に対する激しい迫害が起こり、使徒たち以外はみな、ユダヤとサマリアの諸地方に散らされた。〉(1b)のでした。〈その日〉とは「当日」ということでしょう。しかし〈エルサレムの教会に対する激しい迫害〉や〈使徒たち以外はみな、ユダヤとサマリアの諸地方に散らされ〉ることはしばらくの間続いたことでしょう。〈散らされた〉という言葉からは、まずは積極的な意味は読み取れないように思います。〈使徒たち以外〉というのは、使徒たちは自分たちがエルサレムの教会の牧者として主から召されていると自覚していたからでしょう。また、それで使徒たちは自分たちはエルサレムに留まって、主の召しならばステパノと同じように殉教する覚悟も固めたからでしょう。そして〈使徒たち以外〉の信者はむしろ逃げるように言ったのではないかと思われます。それは妥協してよい、背教してよい、主イエス・キリストを否定してよい、信仰を曖昧にしてよいなどということではもちろんありませんでした。その上で、散っていくしか方法がなかったのだと思います。

しかし同時に〈散らされた〉ことの積極面も見る必要があります。〈散らされた〉先は〈ユダヤとサマリアの諸地方。〉でした。これは明らかに主イエスの約束のみことばと一致します。「しかし、聖霊があなたがたの上に臨むとき、あなたがたは力を受けます。そして、エルサレム、ユダヤとサマリアの全土、さらに地の果てまで、わたしの証人となります。」(1:8)です。どうやってエルサレムを出て、〈ユダヤとサマリアの全土、さらに地の果てまで〉行くことになるのか、そのときは明らかにされていませんでした。しかし、今分かりました。それは〈エルサレムの教会に対する激しい迫害〉によってでした。それはこれまでの使徒たち個人に対する迫害や脅迫などからして全然予想できなかったとは言えないかもしれませんが、それでもやはり生身の人間いにとっては嬉しいことではなかつ

たはずですし、それなりに突然のことと思われたでしょう。しかし、そのような中で、戸惑いながら、仕方なく〈散らされた人たちは〉〈みことばの福音を伝えながら巡り歩いた〉(4)のです。こうして主イエスのみことばが、お約束が、ご計画が実現し、みこころがなされて行ったのです。迫害した者たちが目指したところとは全く逆の結果となって行くのです。このことは、今もこの世で主イエス・キリストを信じ、主に従う信仰の故に困難に合う私たちへの大きな励ましであり慰めです。